
ホタルのニュースレター

日本ホタルの会 2006/9 第38号

虫とりをたのしむ

日本ホタルの会理事 古河義仁

このニュースレターをお読みの皆様の中には、ホタルだけではなく他の様々な昆虫にも興味をお持ちの方も多くいらっしゃると思います。私もその一人で、昆虫少年から昆虫中年へと脱皮し現在に至っています。

私は東京の下町生まれで、家の周りには昆虫が住んでいるような自然環境はほとんどございませんでしたが、そんな私が虫好きになったのは、小学校二年生の時に千葉県松戸市に移り住んだことがきっかけになっています。今ではすっかり様変わりしてしまいましたが、当時は、まだ雑木林が多くあり、フクロウやコジュッケイなどの野鳥が鳴き、ノコギリクワガタやシロスジカミキリも当たり前に見ることができました。谷津(他の地域では谷戸という)のため池では、ミズカマキリが獲物を待ちかまえ、水田ではヘイケボタルがまとわりついてきたものです。夏休みには、捕虫網を持って朝から晩まで虫捕りに没頭し、捕らえた昆虫は標本にしたり、その場で観察してから逃がしたり、或いは飼育して



その一生を細かく観察するという毎日を過ごしておりました。

私が子供の頃と比べると、最近では、お子さん達が捕虫網を持ってかけずり回るという光景は、あまり見かけなくなったような気がします。昆虫への興味は、今も昔も変わらないと思いますが、昆虫がたくさん住んでいる里山環境が失われているということが、大きな原因の一つとして挙げられるでしょう。また、ご両親の教育方針や生活スタイル、或いは社会全体の風潮も影響しているのかも知れません。いずれにせよ、昆虫の生息場所で、

昆虫を手にとって見るという経験は減り、すべてインターネットの情報を頼りに、バーチャルの世界の中だけで終始するということが多いように思います。

当、日本ホタルの会名誉会長である矢島稔先生が園長を務めていらっしゃる「ぐんま昆虫の森」では、観察を終えたら放すことを約束に、捕虫網を貸し出しています。お子さん達は、里山の中で目を輝かせながら、無我夢中でチョウやトンボ、バッタなどを追いかけるのです。こうした光景は、フィールドで体験することの大切さを改めて実感させます。

しかし、虫捕りは捕る側の思想や目的によっては、疑問に思うこともあります。昆虫の分類や系統、生態研究のための標本ならともかく、単なるコレクションとして標本箱に並べられた何百頭ものゼフィルスやギフチョウ、そして壁一面に張り巡らされたモルフォチョウのオブジェなどを見ると、珍しさと美しさゆえに収集家のターゲットにされた昆虫達の悲しい運命を感じてしまうのは私だけでしょうか。

私達が保護しているホタルについても、悲しい出来事があります。例えば、地域住民の方々の地道な努力で、良好な里山環境が保全された結果として自然発生したホタルが、次々に捕られ、その翌日、売店やネットオークションで売られていたりするのです。「ホタル狩り」という言葉さえも、「紅葉狩り」のような風情としてではなく、まさに「狩り」「乱獲」という意味・行為に思えてしまいます。こうした虫捕りは、昆虫にダメージを与えるばかりではなく、虫捕り本来の意味や重要性、楽しさなども覆い隠し、すべてを誤解へと導いてしまいます。

人それぞれ様々なお考えをお持ちでしょうが、私は、これまでの経験や体験から、ホタルをはじめとする様々な動植物はそこに生きているからこそ意味があるということ、そして彼らを見たければ、またその場へ行けばよいという考えを持つようになり、随分前から捕虫網をカメラに持ち替えて、「虫捕り」ならぬ「虫撮り」を楽しんでいます。虫撮りは、昆虫の生息場所において、その場(環境)の四季折々の美しさを切り取る風景写真であり、また昆虫の生きているありのままの姿を写す生態写真でもあります。美しい作品に仕上げるためには、カメラの機械的なテクニックの習得も必要ですし、更に芸術性をも追求するのであれば、感性も要求されるでしょう。尚かつ、昆虫の習性を学ぶことやシャッターチャンスをはたすら待つ忍耐力がなければ、見応えのある一枚にはなりません。ただし、狙った瞬間を美しく捉えることができた時の喜びと興奮は格別ですし、その一枚は学術的にも貴重で重要な資料にもなり得るほど、「虫撮り」は奥の深い趣味・仕事と言えるのではないのでしょうか。

昨今、デジタルカメラの普及に伴って写真撮影を楽しまれる方が多くなっています。デジタルカメラは、その性能も機能も優れたものが、求めやすい価格で購入できるようになり、フィルム代を気にせず気軽に撮ることができます。画像は、パソコン上で簡単に補正や加工ができ、自宅でプリントすることもできますが、私はデジタルではなく、「オリンパスOM-2」という一眼レフを25年以上も愛用しています。リバーサルフィルム(ポジフィルム)の色調や色彩の美しさが昔から好きで、銀塩に多少のこだわりをもって撮り続

けています。ただし、今やフィルムとデジタルの差はなくなりつつあり、マクロ撮影(昆虫のクローズアップ撮影)では、むしろデジタルの方が繊細でシャープな画像が得られるように思います。好みや用途、被写体によって使い分ければ、表現力の幅も広がり、喜びや興奮も増感されるのではないのでしょうか。勿論、虫撮りにおいてもルールは守らなければなりません。デジタル画像をドローソフトで加工し、虚偽の写真を作り出すことは、芸術作品としては認められても、生態写真としては価値がありません。また、撮影のためなら何をしても良いというわけでもありません。当然、立入禁止の場所もあるでしょう。

ホタルの写真を撮るならば、ホタルの発生現場では、ストロボを使用しないことも常識として覚えておきたいものです。

「虫撮り」は、何百枚撮って、ようやく一枚良い結果が得られるか得られないかというも

のですが、昆虫や自然を大切に思いそつと語りかければ、彼らはこころよく出迎えて、良いポーズをとってくれるに違いありません。

「捕る」よりも「撮る」。私が里山から持ち帰るものは、観察記録と写真、そしてゴミと思いついて出たところでしょうか。

「虫とり」は、私たちが昆虫を知り、昆虫と親しむための最も基本的な手段です。ただし、私たち人間だけが満足して終わるのではなく、昆虫や自然環境の保護・保全に少しでも役立つものになるならば、それはすばらしいことではないでしょうか。

少年時代は「虫捕り」を、成長したら「虫撮り」に変態してみるのも、昆虫へのささやかな愛情かも知れません。

写真：「ホタルと里山の写真集」より

<http://members.jcom.home.ne.jp/yy-furukawa/index.html>

【追記】

日本ホタルの会事務局では、会員の皆様に様々な情報提供として、メールマガジンの配信を稼働させました。ホームページの会員募集のページにて、登録ができます。

ご希望の方は、ご登録をお願い申し上げます。

よみがえ

蘇る渡良瀬川と遊水地（後編）

日本ホタルの会理事 川村善治

渡良瀬川も栃木県の佐野まで来ると、流れが遅くなり、川原はヨシ原に覆われ、栃木県藤岡町で巴波川と思川に合流し、渡良瀬川遊水地に入り、茨城県古河で利根川に合流する。遊水地は、栃木、群馬、埼玉、茨城の四県の県境いで、栃木県の最南端にある。

遊水地は、第1調節池、第2調節池、第3調節池と貯水池からなっている。その広さは、3300haという本州の最大の面積である。東京の山手線の総面積5000haに比べ、1700haほど小さい。遊水地の約半分、

1500haはヨシの湿原に覆われ、これほどまとまった湿原としては、本州で最大級の規模である。貯水池は1800haで水量は約2640万m³、東京ドームの約20杯分で東京都民の水瓶にもなっている。

遊水地が出来るまでには多くの争いがあった。遊水地一帯はかつて旧谷中村と呼ばれていた。集落が湿原の中にあった1897年(明治10年)、足尾銅山の機械化による増産が行われ、この時流された鉱毒による被害が渡良瀬川沿いだけではなく、利根川や江戸川にまで広がり大きな社会問題になった。しかも被害はだんだん激化する様になった。ここで立ち上がったのが、栃木県佐野市小中町出身の代議士田中正造であった。正造は渡良瀬川沿いの人々を救う為に努力し、国会で鉱毒による農産物や漁業、その他の被害をとり上げた。

1900年(明治33年)、被害農民一万人が対策誓願の為に上京しようとして、利根川湖畔の川俣で警察隊と衝突し、大勢拘束された悲惨な川俣事件や、正造による明治天皇への直訴も行われた、いわゆる足尾銅山鉱毒事件を経て、1902年(明治35年)に政府は、鉱毒水を沈澱させる為に貯水地建設をきめ、谷中村はその候補地となった。これに村民は反対したが、政府は谷中村を3年間水漬けにするなど手段を選ばず買収を進め、1905年(明治38年)、遂に第一回の村民の移転が行われた。正造は残留民と一緒に



写真1 渡瀬遊水地平面図



写真2
五月のヨシ原は一面緑で覆われ、繁殖期に入ったヨシキリの合唱で賑わう。

最後まで抵抗したが、ついに1913年(大正2年)9月4日、73歳でこの世を去った。

1917年(大正6年)2月、最後の16戸の強制破壊および強制収容が行われ、10年におよんだ反対運動もついに幕を閉じた。

1910年(明治43年)、大洪水をきっかけに利根川改修計画の改定が行われ、1911年(明治44年)、工事に着手した。

1922年(大正11年)に遊水地の工事が徐々に始まり、1970年(昭和45年)に本格的に着工し、同年に第一調整池が、1972年(昭和47年)に第2調整池が、1997年(平成9年)に第3調整池が完成した。

一方、貯水池谷中湖は1976年(昭和51年)から工事に着手し、1990年(平成2年)に完成した。水源の運用開始は平成2年からであった。

渡良瀬川遊水地の広大な湿原はヨシが窒素やリン、植物プランクトンなどを吸着する性質を利用し、水源の浄化を行っている。遊水地は動植物が多数生息し自然の宝庫と言える。植物677種、昆虫類1250種、鳥類217種、魚類32種が棲息し、植物の中にはミズアオイ・ヒメシロアサザ・トネハナヤスリな

ど、全国的に絶滅が危惧されているものもある。鳥類ではオオヨシキリ・コヨシキリが、繁殖期に多く確認されている。貯水池にはカモ類が多く、またチュウヒ類の日本最大の越冬地として、70~80羽程飛来してくる。大



写真3 越冬中のチュウヒ(猛禽類)

型の猛禽類で、羽を広げると約113~137cmに達する。グライダーの様にヨシ原の上を滑空する姿はなんとも言えない雄大さがある。冬になると、カメラを持った多く人が撮影にやって来る。

渡良瀬川と思川の合流地点に野渡橋がある。橋の上で地元の人が2~3人、川を見ていたので、私はホタルの事を聞いて見た。彼らは橋の下流を指さして「昭和40年頃にはカワ



写真4 渡瀬貯水池（谷中湖）



写真5 浮島がある貯水池

二ナがたくさんいて、6月頃はゲンジボタルがたくさん飛びまわっていたが、農薬や護岸工事で全滅したのではないかと話してくれた。護岸工事以前は、白鳥も貯水池に飛来していたと言う。

遊水地全体の外周は約30kmで東京山手線の外回り東京駅—渋谷—上野駅までの距離と一致すると言う。遊水地内の道路は整備されていて、主な道路は小型の自動車なら通行



写真6 ヨシ焼き後の湿原

できる。公園・運動場・ゴルフ場があり、公園内ではサイクリング道や、湿原内の観賞歩道橋、谷中村の遺跡などが整備されている。休日には季節に関係なく、多くの人が景観を楽しむ憩いの場所である。

ヨシ原では年に一回ヨシ焼が行われる。ヨ

シ作りに必要な良質なヨシを育てる為に、毎年3月に全域にわたりヨシ焼が行われ、今年は3月25日に行われた。効果としてヨシを育てる以外に自然環境を保全、樹林化を抑制しヨシ原を保全する・貴重な春植物の発芽に日照を確保する・等があげられる。又この時期、貯水池も年に一回水門を開き排水する。今年は1月中旬に行い全部排水するには約1ヶ月かかった。

池底を約1ヶ月以上日にさらして土壌の日光消毒を行い、3月下旬から水を徐々に流し入れ、満水になるまでこれも1ヶ月はかかる。これは、真夏の時期にカビ臭いにおいを発する植物プランクトンが池に発生するのを予防する為である。

動植物の宝庫でもある遊水地の湿原は、現在、これらの環境を保護する為、国土交通省関東地方整備局が管理をしている。

このすばらしい渡良瀬遊水地を、この先永きに渡って、大事にしたいものである。

追悼特集**佐々学先生を偲んで**

佐々学(さっさ・まなぶ)先生は2006年4月10日、肺炎のため黒部市の黒部市民病院で逝去されました。享年90歳。先生は、「日本ホテルの会」の発起人メンバーの1人であり、発足から1998年(平成10年)12月まで理事長を務められました。ご冥福をお祈りするとともに、関わりのある方々より追悼の言葉をお寄せ頂きました。

◆佐々学先生の履歴書・年譜

- | | |
|--------------|---|
| 大正5年(1916年) | 東京神田で生まれる。 |
| 3月14日 | 内科医廉平の長男、母方の祖父は細菌学の緒方正規、二人の伯父は細菌学の緒方規雄と衛生学の緒方益雄であった。 |
| 大正11年(1922年) | 本郷西片に移り誠之小学校入学。 |
| 昭和3年(1928年) | 東京高師附属中学校入学。 |
| 昭和8年(1933年) | 第一高等学校 理科乙類入学。 |
| 昭和11年(1936年) | 東京大学 医学部入学。 |
| 昭和15年(1940年) | 大学卒業後、伝染病研究所にて細菌学の志を立てた。間もなく、海軍の二年現役軍医となり、駆逐艦「東雲」に乗る。台湾に寄り台北帝大を訪れ、熱帯医学に興味を持つ。 |
| 昭和17年(1942年) | 東京築地の海軍軍医学校にて実験マラリアの研究を担当。蚊の飼育や原虫の検索を独学で開拓。終戦時は海南島の陸戦隊の軍医長。 |
| 昭和21年(1946年) | 伝染病研究所に戻る。ポリオワクチンの研究で有名なセービン博士の助手をつとめ、日本脳炎の蚊を集めるために岡山に派遣される。 |
| 昭和22年(1947年) | 東大助手から助教授になる。伝染病研究所第六研究部に衛生動物研究室を設ける。日本の蚊の分類のため、九州や北海道に採集に出歩く。 |
| 昭和23年(1948年) | 戦後始めてのロックフェラー財団のフェローシップで、アメリカに一年過す。寄生虫学とダニ学(ワシントン国立博物館)の手ほ |

- どきを受ける。
- 昭和24年 (1949年) 八丈島でマレー系糸状虫病と新しいツツガムシを発見する。
- 昭和27年 (1952年) 東大伝染病研究所に寄生学研究部が出来る。
- 昭和33年 (1958年) 東大で初めて寄生虫学の教授となる。中国に1ヶ月余り出かけ、周恩来首相と住血吸虫病の談義をする。
- 昭和41年 (1966年) フィラリア病駆除対策の研究フィールドとして奄美大島に伝研奄美大島病害施設を設立する。
- 昭和43年 (1968年) 伝染病研究所が東京大学医科学研究所に替わる。大学紛争がはやかな時。
- 昭和48年 (1973年) 医科学研究所を辞め、米国政府に招かれNIH(国立衛生研究所)で研究を行う。世界における過去のフィラリア病研究報告をまとめる。
- 昭和49年 (1974年) 東大教授を兼ねたまま、つくばに新設の公害研究所の副所長となる。
- 昭和51年 (1976年) 東京大学名誉教授となる。
- 昭和52年 (1977年) 第2代の国立公害研究所長となる。霞ヶ浦から大発生するユスリカの幼虫がヘドロを食べて水質浄化に大きな寄与することを知り、それ以来ユスリカ研究に取り組む。
- 昭和56年 (1981年) 帝京大学医学部の教授となる。
- 昭和57年 (1982年) 第2代富山医科薬科大学の学長となる。
- 昭和59年 (1984年) 宮中講書始の儀にて、昭和天皇の前で御進講の栄に浴す。
- 昭和63年 (1988年) 富山医科薬科大学名誉教授となる。
- 平成3年 (1991年) 大学のある大山町の佐々成政祭りに担ぎ出され、成政に扮して町内を練り歩く。ホタルを呼び戻そうと全国に呼びかけ「日本ホタルの会」を結成する。
- 平成7年 (1995年) 黒部川河口の近くに建てられた笑福学園の理事長となる。また、笑福クリニック及び環境福祉研究所を開設する。
- 平成10年 (1998年) 富山国際大学名誉教授となる。
- 平成15年 (2003年) 6月に米寿を記念し米寿記念業績集を出版。

編：川村善治(日本ホタルの会理事)

追悼特集

■佐々先生をしのんで

日本ホタルの会名誉会長 矢島 稔

4月10日、家に帰り、夕食のあと私はいつものように夕刊を見るのが常である。そして「え！」と声をあげた。訃報欄に「佐々学・昨日逝去」とある。そこですぐ川村理事に電話した。川村さんが個人的にも佐々先生とのおつき合いが長いからだ。しかし川村さんは未だご存じなかった。それ程突然のことだったのだろう。その週の15日(土)に理事会が予定されていたので役員にその旨を知らせ、理事会の前に全員で黙祷を捧げた。

佐々先生の業績については「米寿祝賀事業」の一つとして研究業績目録がまとめられて刊行されているが、それ迄にも東大退官時と富山医科大学退官の時にもまとめられていて、米寿の時はその後に出された業績を追加補足され2003年6月に刊行されているので、恐らくこれが全てに近いものと思われる。衛生動物の大家として開拓し医動物学者として幅広く研究されていた事は有名だが、その論文が例えばユスリカ：244編、蚊：135編、ツツガムシ：148編、ダニ：84編、衛生動物：177編、フィラリア：148編、寄生虫：143編という膨大な論文の数だけを知っても、如何に精力的に研究されていたかがしのばれる。

先生が実業之富山47巻11号に「郷土にホタルを呼び戻そう」というエッセイを書かれたのは1992年で、ホタルに関心を示された最初のものであった。次いで同誌に「日本ホタ

ルの会」というタイトルで書かれ(1999年)、その中に1991年7月(平成3年)に日本ホタルの会は結成されたと書かれている。最初のエッセイを書かれた前年(1991年)にこの会は設立準備案をつくり、発起人20人の名簿を発表している。そのメンバーに佐々先生をはじめ、川村理事、日高元会長、そして私も入っている。その後バブルがはじけ、社会情勢は大きく変わり、この会も事務局の維持すら危うい期間があった。しかし、今こうして機関誌に追悼文を書く事が出来、基礎の礎石を置かれた佐々先生をしのぶ事ができるのは若い現在の役員の方々の努力のたまものであり全会員の支持のおかげである。

この会の第1回のシンポジウム(1992年10月12日、経団連ホール)で基調講演を下さった佐々先生の言葉の中から一部を紹介し、心から御冥福をお祈り申し上げたい。「ホタルが沢山出てくる環境はたしかに人間にとって望ましいが、ホタルだけが大事なのではない。人間の生存のために有害な蚊などの駆除のためにホタルにかまっていられない場合もある。だがホタルをふやして害虫をなくせないだろうか？」というのが私の夢である。

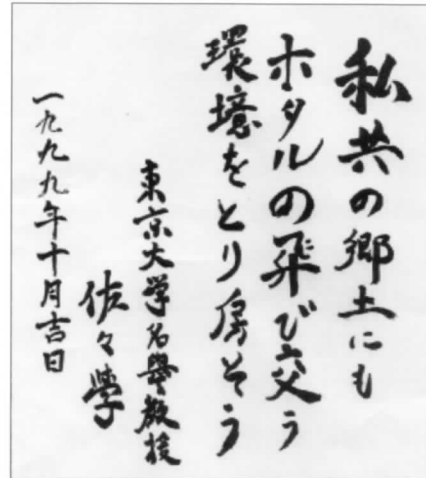
追悼特集

■佐々学先生の追悼

日本ホテルの会理事 川村善治

尊敬する佐々学先生は、平成18年4月10日逝去されました(享年90歳)。先生の強い御意志により御遺体は富山医科薬科大学に献体され、葬儀は執り行われませんでした。

先生は大正5年(1916年)3月14日東京神田に生まれました。内科医廉平の長男。母方の祖父は細菌学者の緒方正規、二人の伯父は細菌学者の緒方規雄、衛生学者の緒方益雄であります。大正11年(1922年)本郷西片町に移り、誠之小学校に入学。そのころ自宅の庭の桜の木にたくさんのセミが鳴き、ダリアの葉の上にトンボがとまり、空にはコウモリが舞っていたそうです。昭和3年(1928年)東京高師附属中学校に入学し、夏は辻堂海岸の松林の中や蓼科高原に出かけ、自然に親しむのが大好きでした。昭和8年(1933年)第一高等学校理科乙類に入学。動物学を専攻したかったのですが、先生から医者になってから動物学をやれと言われました。昭和11年(1936年)東大医学部入学。先生は臨床医になるつもりは毛頭なかった様です。そのせいか、臨床の講義はよくさぼって伝染病研究所に入り浸って病原菌の生物学に大変興味をもていましたが、寄生虫学を専攻しようとは夢にも考えていなかった様です。昭和15年(1940年)大学卒業後、先生は伝染病研究所に入り細菌学の志を立てました。卒業後は間もなく海軍において2年間現役軍医となり、台湾の台北帝大を訪問し熱帯医学に興味



をもっていた様です。昭和17年(1942年)戦争半ばで呼び戻され、東京築地の海軍医学校で実験マラリアの研究を担当、蚊の飼育、マラリア原虫を独学で開拓しました。その後は中国海南島でマラリアに取り組みました。昭和21年(1946年)復員して伝染病研究所(伝研)にもどりました。昭和33年大学を兼任し伝研にはじめて寄生虫研究部を設け教授となりました。私は35年伝研試験製造室に入り、上司は沢井芳男先生でした。佐々先生は沢井先生と大学の同期でした。

伝研では年2回、研究部で野球の試合を行います。私達の部員は寄生虫部員と組んで試合をします。佐々先生もよく応援に来ていました。先生はバトミントンとテニスが上手で、夕方になるとよく練習していました。昭和43年、伝研から医科学研究所に替わる時に佐々先生は所長となりましたが、東大紛争

で御苦労なされたと思います。昭和48年(1973年)、先生は医科研の所長をみずからやめさせてもらいました。その後米国政府のNIH(国立衛生研究所)招かれフィラリア症のこれまでの研究報告をまとめました。

帰国後、昭和52年(1977年)国立公害研究所の所長となり、霞ヶ浦で大発生するユスリカの幼虫がヘドロを食べて水質浄化に大きく寄与することを知り、先生はユスリカの研究に熱が入り、日本のユスリカを全部調べることになりました(ユスリカやダニ類は人間に喘息をおこします)。

戦後の南西諸島、奄美大島及び沖縄には風土病が多発していました。寄生虫病、ハブ咬症が多く島の人の生活を悩ましていました。戦時中から敗戦まで先島諸島はマラリアが多発し、沖縄本島より疎開した児童が全員感染し、薬がないため尊い命をなくしました。敗戦後は米軍や佐々先生の御活躍で現在マラリア症は絶滅しましたが、戦後も寄生虫疾患、蚊が媒介するフィラリア症疾患、ハブ咬症が多発していました。佐々先生は先頭となり奄美大島及び沖縄の寄生虫症及びフィラリア感染者に薬の投与と媒介蚊に対する薬剤の残留噴霧を行って、現在南西諸島のフィラリア症は絶滅致しました。これは佐々先生の功績で世界的に成功した例です。また、先生はフィラリア患者の薬の完全治癒量を世界で初めて確立した方です。ハブ咬症の方は我々の分野の研究です。治療血清の改良や予防ワクチン及びハブ捕獲等が成功して、現在は奄美、沖縄でも死亡者はなく、咬症患者も以前より1/5に減少しました。

私が医科研を退職し日本蛇研の沖縄支所

に滞在している時、佐々先生は(55年ころ)琉球大学医学部ができた時の最初の客員教授と蛇研の理事長を兼任していました。先生は年に数回沖縄にこられ、ユスリカの採集の時は、私もよく手伝いました。沖縄南部の溝川の草むらで昆虫網を左右に振るとユスリカが沢山とれました。私に向かって先生は、なかなか才能があるねと煽てられ、君、衛生動物をやらないかと言われた時もありました。後で先生から論文が送られてきました。沖縄では新種のユスリカが多くいたそうです。その1つのユスリカにカワムラと命名してありました。先生の、論文を書く早さには敬服致します。

また、先生の奥様より聞いた話ですが、地方で先生がユスリカを採集している時、子供が見ていて「メガネをかけた変なおじさんが昆虫網を頭にかぶり、口で何かを吸って踊っているよ」と、お巡りさんと呼ばひ駆けつけてきたことがありました。多分、麻薬常習者と間違えたのでしょう。後で笑い話になりました。先生はどこに行くにもボストンバックにユスリカの採集器具を持参します。

先生は研究員各々に対し、自分がしたいユニークな研究テーマを与え、各自が研究し論文発表後、日本国内また外国からも高い評価を頂く方が多くいました。先生は弟子を育てるのが大変に御上手な方です。日本全国の大学や民間の研究所、外国でも先生の教えを受けた方は教授や上級職になって活躍している場合が大変多いようです。

最後に、平等に愛された先生の貴徳をあらためて皆様と共に賛美し、感謝申し上げる次第です。これからも人の鏡として変わりなく見守って下さるようお祈り申し上げます。

追悼特集

■風土病との闘い

日本ホタルの会副会長 鈴木浩文

私自身、佐々先生との直接の接点はありませんでしたが、日本ホタルの会の事務局を通して、シンポジウムでお世話になりました。

佐々先生には、第1回のシンポジウム(1992年)では基調講演を、そして第8回(1999年)まで開催挨拶をお願いしました。第8回目は、ちょうど熱帯学会の幹事会と日程が重なってしまい、当日は川村理事より原稿を代読して頂きました。シンポジウムの挨拶では、よく沖縄・奄美諸島における風土病の話題が上りました。つい数十年前まではフィリッパやマラリアが蔓延しており、現在の観光リゾート地からは想像もつかない話でした。

本土においてもツツガムシ病や日本住血吸虫病などの風土病を撲滅するために病害動物の駆除法などの研究をされていたわけですが、現在はホタルを保護して増やそうという会の理事長を務めているという、時代の趨勢を感じさせるというようなお話も

ありました。

先生の数ある著書の中に「風土病との闘い」という一般向けの本があります。岩波新書(1960年)、当時定価100円。研究室を離れて全国の僻地といわれるところを訪れ、そこの人々の間に巣食う数々の風土病の実態を調べ、自然に潜む病根の姿を明るみに出そうと試みた経験を集めたものです。風土病の病因となる生物を突き止め、その生物の分類・生態を明らかにし、住民の風俗・習慣、労働などの特徴がいかに病因との接触に関連しているのかを究明していく—そして、現地で集めた研究材料を研究室に持ち帰り、原因、予防や治療の対策を解明し、再び現地を訪れ、集団検診、予防、治療の実験が始まる—風土病との闘いとその探求のために奮闘する医学者の意気込みが、現在でも熱く伝わってくる一冊で、先生の研究姿勢が伺えます。改めてご冥福をお祈り致します。

■新任理事プロフィール

荻野 昭（おぎの あきら）

1942年生まれ 埼玉県日高市在住

◆経歴

1960年、豊島園・昆虫館に就職、昆虫の採集、生態・飼育・展示及び植物を矢島稔夫妻より教示。その後、多摩動物公園に移り生態園の建設、運営に携わり、2005年3月迄昆虫一筋の生活を送る。

屋外の人工飼育場(1973年)でゲンジボタルの飼育、1988年からヘイケボタルの周年展示。陸生のクロマドボタル・ツシママドボタル・オオシママドボタル等の飼育を経験する傍ら、多くの自治体を中心としたホタル復活への指導要請に応需。

『カブトムシ「昆虫飼育日記」』学習研究社・『ホタル』偕成社(共著)の著書がある。

◆所属

東京ホタル会議顧問

日本鳴く虫保存会講師

◆コメント

長年の昆虫飼育から教えられた「しぜんのしくみ」を会の主旨(ホタルも生息できる環境作り)に少しでも役立てればと考えています。

山口 孝 (やまぐち たかし)

東京都青梅市在住

◆所属

青梅自然誌研究グループ、青梅オオタカ調査チーム

◆保全活動とフィールド

東京都青梅市内において、里山保全活動、生物調査等を行っています。

活動の中心は、鳥類(主にワシタカ類、フクロウ類)、両生類、ホタルの観察及び調査です。

◆コメント

私が住む町では、幸いなことに多くの場所でホタルを見ることができます。私も、その幻想的な発光に魅せられ、小学生の頃にはゲンジホタルの観察を始めました。その後、興味の対象は、ヘイケボタル、さらには陸生ホタルへと変わっていきましたが、現在でも、冬を除く週末の夜は山や里でホタルの光を探し歩いています。

社会人になってからは、地元での里山保全活動に参加していますが、様々な生物と接しているうちに、全国各地で盛んに行われている、ホタル保護に特化した環境保全活動に疑問を感じるようになりました。日本ホタルの会に入会したのも、ホタルを里山環境の象徴と捉えることの意義を学びたかったからです。

今後、日本ホタルの会の活動を通して、身近な生き物が生息する環境の保全及び再生に尽力したいと考えています。よろしくお願いいたします。

事務局からのお知らせ

■日本ホタルの会活動報告

ホタル観察会

2006年6月24日(土)、八王子市館町池の沢におきまして、ホタル観察会を実施しました。

当日は、池の沢に蛍を増やす会の皆様のご協力のもと、約40人の参加を得て昼間のフィールド見学、意見交換会、ホタル観察会を行いました。観察会後も参加者と池の沢に蛍を増やす会の皆さん、それに日本ホタルの会スタッフが加わった意見交換が行われました。

池の沢は、住宅地の背後にあるとは思えない豊かな自然が残されており、池の沢に蛍を増やす会の皆さんによる手入れが行われ、里山の環境がよみがえりつつあるようです。

ご協力いただきました池の沢の皆様に誌上を借りましてお礼申し上げます。

第11回談話会

2006年9月16日(土)、恒例となりました談話会を昭和女子大学にて開催しました。

今回は、栗飯原一郎さんをお招きし、淡水産貝類のお話を伺い、参加者との意見交換を行いました。栗飯原さんから貝の標本を手にとりながら、淡水貝、陸生貝の実態、外来種問題、琵琶湖の状況等々多くの貴重なお話がありました。今後、淡水産貝類についてニュースレター誌上にて報告していただく予定となっています。

ホームページ情報

日本ホタルの会ホームページで日本産ホタル図鑑の作成を行っています。

この図鑑は参加型となっており、みなさんのお持ちの情報、知見を書き込むことができます。

ぜひ、読者のみなさんがお持ちの情報を投稿していただき、充実したものにできればと考えております。

理事会報告

2006年7月22日福生市の事務局において、理事会を開催しました。第11回談話会の詳細、10月29日のホタルサミットへの参加、来年度以降のシンポジウム及び観察会のあり方及び第38号ニュースレターの詳細について審議しました。

イベント情報

【2006ホタルサミット in 八王子】(予定)

東京ホタル会議、創価大学蛍桜保存会、日本ホタルの会 共催(予定)

開催日：2006年10月29日(日) 12時から

場 所：創価大学

※詳細は、ホームページでお知らせします。

ホタルのニュースレター (第38号) 2006年9月30日発行

編集 日本ホタルの会事務局

発行 本多 和彦

197-0011 東京都福生市福生 487

日本ホタルの会事務局

TEL & FAX : 042 - 530 - 2111

e-mail : inoue@nihon-hotaru.com

URL : [http : //www.nihon-hotaru.com](http://www.nihon-hotaru.com)



日本ホタルの会
JAPAN FIREFLIES SOCIETY

印刷 文明堂印刷株式会社

239-0821 神奈川県横須賀市東浦賀町 1-5

TEL : 046-841-0074 FAX : 046-841-0071
